

## 第4回千歳市商業振興懇話会 開催結果

日 時 平成27年12月25日（金）午前10時から午後12時15分

場 所 千歳市水道局 2階 会議室3

出席者 委員13名、事務局ほか8名

- 議題等
- 1 報告事項（市民アンケート・懇話会等での意見について）
  - 2 審議事項（商店街、タウンプラザ周辺に求められる機能について、取組案について）
  - 3 その他

結 果 1、2、3の議事経過は次のとおり。

### 【発言要旨】

議事経過の概要は次のとおりである。

#### 1 報告事項

- ・各懇話会、分科会等における意見等の状況がわかる資料となっているので、今後の議論の参考としていく。

#### 2 審議事項

次のような意見があった。

○商店街、タウンプラザ周辺に求められる機能について

- ・千歳高校の生徒とタイアップし、高校生が開発した商品の展示や販売ができる施設や、「おいしさ千歳産」として展開している産品が一か所で堪能できる場所など、空き店舗を利用して回遊型のゾーンとして、気軽に来訪できるような場の提供ができればよい。
- ・千歳市で生産されている商品等を、一か所に集めることで市内工場の理解が深められるエリアや、街に居ながらにして支笏湖を楽しめるエリア、小学生の社会科見学や観光客が商店街を歩きながら土産を買いそろえることができるエリアなど、商店街の複数の個店がアンテナショップ的にゾーン形成することで、「千歳はおもしろいまち」と感じてもらえる場所にできれば活性化の可能性はある。
- ・先日「青少年のための科学の祭典 千歳大会」が開催され、市内に立地する製造業の会社が複数出展し、市内工場や製品の理解を深められるイベントであった。千歳の工場で生産されている商品等を、一か所に集めることで市内工場の理解が深められる施設等の意見は、このようなイベントを中心市街地で常設化するイメージかと思う。
- ・千歳のよさを紹介する場所を設置するに当たっては、大掛かりなものだけでなく、展示品やパンフレットの陳列だけでなく、おもしろさを伝える人がいてくれると良い。
- ・千歳には、いろいろな地域資源があるのに、あまり市民もよく知らないものもあり、そういうものを紹介する場所として、タウンプラザ周辺も考えられるし、どこかの商店街でひとつの特徴づけとしてトライしてみるのもいいと思う。

- ・旭川の買物公園の例であるが、駅のほか、買物公園にも、立ち入りが自由な休憩スペースが分散して設けられており、清潔で広いテーブルのある場所もあった。その周囲には飲食店があり、市民は休憩場所に食べ物等を持ち込んでくつろいでいた。また、駅には外国語対応のための人が配置され、大画面スクリーンでの旭川に関する映像上映、パンフレットの展示などがされていた。地元の工業製品や旭川の名物である木彫製品の紹介スペースもあった。
- ・旭川買物公園の事例は、コミュニティ機能を展開しつつ、物販や観光につなげる形になっている。
- ・ネットショッピングにおいては、店に入って現物を確認してからネットを通じてその商品を購入するという消費パターンが増加傾向にあり、個店における物販が成立しにくい状況がある。一方で、商品を購入する際には、商品の知識や情報も必要なもので、そう意味でいうと、情報発信とか、コミュニティ機能がないと品物を選べない場合もある。昔ながらに、店舗で商品の説明をして、その店舗で商品を買うという自己完結的な商業では、立ちいかない時代になってきている。時代に即した今後の商店街を考えていく上で、例えば、うちは2つなり3つなりのトライをしてみようという手法もある。それが商店街ごとに違っていいように感じる。インディアン水車通り商店街であれば、インディアン水車や道の駅、水族館を活かした商売が成立するわけであり、商店街ごとに特色が出て当然である。

#### ○新たな商業振興プランにおける取組案について

- ・店舗やメニューなどの外国語表記については、英語表記以外に、韓国語や中国語の表記についても外部からの協力があるとよい。外国語表記に対応したくても、アドバイスしてくれる人がいなくて、ここまで後退してしまったのではないかと考えられる。
- ・今まで商店街と一緒に課題解決をしてくれる人達がいなかったと思う。外部の人が何らかの形で商店街に関わることができるような流れになってないので、事情や状況が伝わらずに商店街への評価が低くなっている。高校生や転入者などが参画できるよう、外部の支援があれば、商店街等でも活用できると思う。
- ・外国人客には食品サンプルの活用が有効と聞いており、このようなことも含め外国人の来店を増やすにはどうしたらいいか、工夫や知恵出しが必要である。
- ・外国語表記については、宗教上の理由やベジタリアンなどの対応も必要であり、このような点も考慮すると、さらに外国人が入店しやすくなる。また、店舗入口に「英語OK」の表示や、メニューを写真で表示し、指さしによる注文ができるとなお効果的である。
- ・外国人への対応が必要と感じていても、個人経営の小さな飲食店では対応が難しいため、これらを支援するビジネスや相談窓口などの情報提供も必要である。
- ・運輸局や札幌市などのホームページ上において、インバウンド対策として、指さし英会話のソフトがダウンロードできるなど、自由に使えるツールを提供している。運輸局のホームページを開くと、外国人対応用のマニュアルを自由にダウンロードすることができ、これを基にテーマを絞り、講師等を招いて知識のステップアップを図るといことも考えられる。外国人対応の常識的な部分は、国等においてマニュアル化しているので、ホームページの案内をするだけでも随分違うと思う（コンサルタントから発言）。
- ・商店街や個店を対象としたゾーン別マップの作成について、消費者としては、商店街組合加入の有無にかかわらず、すべての個店等を網羅した使えるマップを作ってほしい

い。商店街組合としては、未加入店舗の状況や理由の把握が必要ではないか。組織への加入の有無により、個店がマップから外れるようなことは避けてほしい。

- ・「消費者が使う側のマップ」を作るのか、「組合加入の有無に関係した、商業者側のマップ」を作るのか。マップを作成する意義を問い直す必要を感じる。
- ・以前函館市を訪問した際の商店街マップは、全ての店舗を網羅していたが、組合員と非組合員は色分けされており、差別化を図っていた。また、「(このマップに記載された)参加店は商品に責任を持っています。」というような趣旨の記載があり、単にマップで個店が紹介されるだけでなく、各商業者の意気込みがうかがえる内容となっていた。
- ・千歳の商店街は、駅の前から少し外れた場所に位置している。駅からニューサンロードまでは歩いて100mぐらいの距離なので、駅を中心に、歩いて行ける範囲のマップがあればいい。駅を利用する観光客を、街の中に呼びこむためのアクセス方法がポイントになると思う。
- ・千歳は、札幌のような碁盤の目状の街区ではなく、町名を表示するだけでは店舗の位置が分かりずらいため、マップの重要性は高い。
- ・高齢者や障がい者は、インターネットやホームページから情報を得ることが難しく、(紙の)マップがあるととても助かる。視覚障がい者の場合は、音声のソフトが日常生活用具の給付対象になっているが、全員が給付を受けられるものではなく、さらに別なソフトを組み入れる必要もあり、費用負担が大きい。パソコン操作が不得手な人もいる。
- ・障がい者の入店について、お店の人は、車いすの方が来て初めて、入店の際に支障となる段差の存在や自動ドアの必要性に気づかされるのではないか。来店してもらって初めてわかるという点では、外国人対応も同様である。
- ・建物のドアの開閉や店舗への導線、最寄のタクシー乗降場所やバス停留所、道路の状態などにも目を向けていただくことが必要で、これらについて、個店それぞれが取組むのではなく、商店街が連携を取っていかないと活性化がないように思う。
- ・千歳市の大きな課題として、駅のバスターミナルの使い勝手が悪く、サインがよくわからないという話を聞く。バス路線の利便性については、市が取組の中心と思うが、大学をもっと利用して相乗効果を図ることを検討してはどうか。例えばデジタルサイネージのように、案内板をデジタル化し、外国人に対しては外国語に切り替わる、通常は店の宣伝を表示しているが、必要な時には地図に切り替わるなどのツールが考えられる。